

2、アトム時代～SFか科学か

▼ナビゲーター

手塚眞

▼パネリスト

富野由悠季 荒俣宏 大森一樹 石上三登志

▼司会進行

さとう珠緒

<さとう>

ただいまより、東京都・東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館主催、読売新聞社後援により、手塚治虫生誕80周年記念「手塚治虫アカデミー」を開講いたします。この「手塚治虫アカデミー」は、東京ならではの芸術文化の創造・発信、芸術文化を通じた子どもたちの育成を目的とし、東京都と東京都歴史文化財団が今年度より始動いたしました、東京文化発信プロジェクトの一環として実施しております。東京が、2016年オリンピック・パラリンピックの立候補都市として承認され、世界の注目を集める今、こうした文化イベントの開催を通じて、改めて芸術創造都市であることを国内外に強くアピールして参ります。東京文化発信プロジェクトでは、このほか様々なイベントを開催いたします。詳しくは、お手元のパンフレットをご覧ください。わたくしは、この「手塚治虫アカデミー」の司会進行役…と、この台本には書いてあるんですけども、ほぼ生徒役で、皆さんと一緒に手塚作品を学ばせていただこうと思って来ました、さとう珠緒です。よろしくお祈いします。

今日は、手塚治虫さんの80回目のお誕生日になります。その80周年を記念して、全国いろいろな所でイベントが行なわれていますが、今日のこのイベントも、そのひとつとなります。それでは、第2回目のシンポジウムを開始したいと思います。まずはこの企画者でもあり、ナビゲーターを務めていただきます、手塚眞さんをご紹介します。手塚眞さん、お祈いします。

<手塚>

皆さん、こんにちは。手塚眞です。本日は「手塚治虫アカデミー」によろこそおいでくださいました。このアカデミーは、手塚治虫の人と作品を語り合いながら、日本のアニメ文化・マンガ文化について考えていこうという、連続シンポジウムです。なんと言っても、今の日本の文化で、世界で一番知られているのがマンガとアニメなんです。それはなぜかと言いますと、日本のマンガやアニメが、世界の中で比類ないものです。ほかの国にはない質の高さ、幅の広さを持っているということで、めずらしいと言われているわけです。ではなぜ、これほどまでにマンガ文化が盛んになったかと言うと、それはやはり、手塚治虫がいたからだということに結論付くわけです。ということは、手塚治虫がやってきたこと、その世界について語り合うということは、現代の日本のマンガ・アニメ文化、そしてその未来について考えて行くことに直接繋がるということで、この「手塚治虫アカデミー」を開かせていただきました。今日は2日目になります。

<さとう>

今日も昨日に引き続き、手塚さんと言うとお父様と混同してしまうので眞さんと呼ばせていただいていいですか？

<手塚>

はい。じゃあ今日も、珠緒さんと呼ばせていただきます。

<さとう>

よろしくお祈いします。

<手塚>

よろしくお祈いします。今日はなんと言っても、手塚治虫の誕生日です。元々明治天皇のお誕生日でもありましたけれども、文化の日です。手塚治虫の誕生日だったからということかどうかは分かりませんが、「まんがの日」ということにもなっています。

<さとう>

お家とかでは、パースデーケーキでお祝いをしていたんですか？

<手塚>

いつもやりたかったんですけども、やはり大変忙しい人で、自分の誕生日といっても遊んでられないんです。もし誕生日に家にいたとしても、ずっと仕事場に籠ってマンガを描き続けているという感じでした。

<さとう>

ロウソクを「フツ」と。

<手塚>

なかなかそういう光景を作れないんですけど、でも時々、自分で無理をして時間を作ると、誕生日なのに、みんなのことを祝ってくれるんです。

<さとう>

どうのことですか？

<手塚>

「外でご飯を食べよう」と自分で企画して、自分でお店も決めて予約を取って、家族全員を連れて行って、みんなに美味しいものを食べさせるんです。全部自分で段取りして揃えて、そこで家族に祝ってもらうんです。そうやって家族みんなで盛り上がるのを、すごく楽しみにしていたという感じです。家族に対してもそうだったんですけど、同じように、人に対して本当に優しく、心遣いのある人だったと思います。さて昨日は、手塚治虫がやってきたことを、デビューからずっと遡っている見えて来たんですけど、今日はその代表作である『鉄腕アトム』です。もちろん、珠緒さんも「アトム」はご存知ですよ。

<さとう>

はい、知っています。リアルタイムの世代ではないですが、もちろん知っています。

<手塚>

どういう印象がありますか？

<さとう>

そうですね。とにかくかわいい。絵がかわいいです。ボールペンとか、グッズを買ってしまうぐらい好きです（笑）。でも、ちょっと詳しくは知らないんです。

<手塚>

鉄腕アトムの誕生日はいつか知っていますか？

<さとう>

分からないです。いつですか？

<手塚>

マンガの中の話ですけども、鉄腕アトムは2003年の4月7日に生まれているんです。ということは、もうこの世の中は「アトムの時代」になっているのかということがあります。手塚治虫は、いろいろな科学のマンガを描いてきました。アトムもそのひとつだと思いますけれども、そういういろいろな科学マンガの影響が、果たしてこの現実の日本に、あるのかないのか。ロボットはいつ生まれるのか。そんな話を、今日は展開していきながら進めていこうと思います。よろしくお願いします。

<さとう>

お願いします。ということで、今日の豪華なパネラーの皆様を紹介したいと思います。まずは、ガンダムの生みの親で、アニメーション監督・作詞家・小説家でもあります、富野由悠季さんです。日大芸術学部映画課を卒業後、手塚治虫主催の虫プロダクションに入社。誰よりも早くコンテを描くことが認められて、『鉄腕アトム』の後半の、多くの作品の演出を担当しました。その後フリーになり、初の監督作品『海のトリトン』を監督、そして、あの伝説の『機動戦士ガンダム』の総監督を務めました。

続きまして、作家の荒俣宏さんです。百科事典の編集に関わりながら書かれた小説『帝都物語』がベストセラーになり、日本SF大賞を受賞、映画化もされて話題になりました。神秘学、博物学、風水等の分野にわたり執筆活動を続け、手塚治虫文化賞選考委員を務められております。「日本の知の巨人」と言われております。

続きまして、映画監督の大森一樹さんです。高校時代より映画製作、京都府立医科大学在学中に撮った『オレンジロード急行』で、城戸賞を受賞。『ヒポクラテスたち』『恋する女たち』、SFものでは『ゴジラ対キングギドラ』を監督し、大変話題になりました。映画製作で数々の賞を受賞しております。よろしくお願いします。

もうお一方ご紹介します。映画評論家の石上三登志さんです。電通に入社、映像クリエイターとして「レナウン・イエイエ」「男は黙ってサッポロビール」など、多くの人気CM制作に関わられました。映画『けんかえれじい』『竹取物語』『漂流教室』等の脚本執筆に参加されております。映画・ミステリー・SF・コミック・サブカルチャー評論などを手掛けられております。それでは、私たちも着席させていただきます。豪華なパネラーが揃いました。

<手塚>

こういう顔ぶれが揃うということは、なかなか稀だと思いますが、たぶん皆さん、手塚治虫についてひと語りたいたいという気持ちがお強いと思います。

最初に私のほうから、今日のシンポジウムの趣旨を、もう一度簡単にご説明させていただきます。先日、とあるフランスの映画監督にお会いしました。彼は『鉄腕アトム』に大変興味を持っているんですが、その前にいろいろな、日本に現実にあるロボットの開発者に会ったと言うんです。もちろん皆さんもご存知の「ASIMO」や「AIBO」など、いろいろなロボットが日本にはあるわけです。これらの開発者の方々が、皆さん『鉄腕アトム』を若い頃に読んで、ロボット開発を考えたとお答えになったんです。その時に、そのフランス人の方が「これはすごい。たったひとつのマンガが、その国の科学技術にこれほど貢献し、影響を与えているというのは、非常に不思議である」というようなことを語っていたのです。日本に住んでいる私たちは、『鉄腕アトム』をずっと知っていますし、そういう流れでロボットや現代の科学技術、町並みなどが生まれてきたと思うことも多々あると思いますが、これはほかの国の方にしてみると、非常に不思議に思える。果たして、「本当にひとつのマンガが、そこまでの影響力を持って、技術を進めてきたのか」と。もちろん「マンガ」という文化、あるいは「アニメ」という文化に対する手塚治虫の貢献度は絶大なものだったということは、何の疑いもないと思います。むしろ、現代のマンガを生んだ人間だということをはっきり言えると思いますけれども、科学や科学に近い分野において、手塚治虫はどれほどのことを行って来たのかということ、今日は中心にしなご話をさせていただきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

<さとう>

よろしくをお願いします。それではお一方ずつ、手塚マンガとの出会い、印象、エピソードをお話いただきたいと思います。『鉄腕アトム』や科学マンガに対する、思いや感想でもけっこうです。まずは富野さんからお願いします。

<富野>

手塚先生の作品のことについては、こちらのお歴々が客観的な言い方をなさると思うので、僕は『鉄腕アトム』の制作の当事者の立場としてのことを、お話させていただきます。

小学校4～5年生まで出来の悪い子どもでして、雑誌に載っているような連載小説でさえ読めませんでした。そして、絵物語の活字を追うぐらいのことしかできなかったんです。小学校5年生の暮れに『アトム大使』というマンガを見た時に、印刷されている媒体で好きになれるものを、初めて見つけられたんです。それが翌年、昭和28年だったと思いますが、4月から『鉄腕アトム』という連載マンガになりました。だから、アトムの誕生日が4月7日なんです。『少年』の発売日です。たまたまそれを見ることで、小学校6年生の時の印象というのが、「世の中には小説やマンガがいっぱいあるけれども、『鉄腕アトム』だけは好きになった」という作品なんです。それは中学生いっぱいも、その印象は変わりませんでした。僕の場合には、大学を卒業して就職口がなかった時に虫プロダクションに拾われましたので、たったひとつだけ好きになった、たったひとつだけ作品名と作家の名前が繋がって、テレビアニメーションの仕事させてもらうという縁をいただけたのです。最終的に『鉄腕アトム』のオンエアが終わった時に……確認しておきますが、モノクロの『鉄腕アトム』です。一番演出本数が多い演出家になりまして、先輩方から徹底的に嫌われたというのが、僕の立場です。つまり、後から虫プロに入って、一番演出本数をやったために、本当に嫌われまして、当時の先輩方が僕に声をかけてくれるようになったのは、この10年ぐらいです。僕にとっての一番重要なことは、『鉄腕アトム』だけが好きだったということです。そのことから「このマンガはなんなんだろう」と考えました。貸本屋の時代ですから、そこで手塚先生の、その後になってから「SF3部作」と言われている作品を借りて読みまして、マンガでもこんなに長い物語を描くものがあるんだということを知りました。僕にとっての手塚作品のトドメは『来るべき世界』と言う、単行本で2冊になって出ているマンガがあります。それはその後カラーになって、『フウムーン』と言うバカなアニメを作ったプロダクションがありまして、許しがたいと思っています。『来るべき世界』という作品は、僕にとってはおそらく世界一の名作だと思っています。どうして僕のような子、つまりお勉強ができない、手塚マンガしか読めなかった子がそう思ったんだろうか。今日のテーマとも関わってくるんですけど、ひとつだけあるのは、僕にとっては『鉄腕アトム』の中と、SF3部作の中に表れているもので、教えてもらったものがひとつだけあるんです。「戦争に負けた日本人でも、こういうものが描けるマンガ家が出てきた」ということです。だから僕にとっては、先生はマンガ家ではなく、作家だったんです。日本で戦後初めてノーベル賞を取った湯川博士、日本人で初めて自由形で世界記録を出した古橋選手という人たちに、僕にとって「戦争に負けたからと言って、絶望しなくていいよ」ということを教えてくれたというのが、手塚先生のSF3部作と『鉄腕アトム』だったんです。それ以外の手塚作品に関しては、今日はコメントを控えさせていただきます。

虫プロダクションに入って、生身の手塚治虫を見た時に「この方はとんでもない方だ」ということを教えられました。その教えられた一番のことを、今日お話しします。

「天才」という人が本当にすごいと思ったのは、天才だのなんだのという以前に、日々の努力が凡人のレベルではないということです。1日にどう多く見積もっても、3時間か4時間寝ると、翌日もう働いているんです。その姿を4年間見せられた時に、才能が先なのか努力が先なのかということが、本当に分からなくなりました。それでいて、お写真でお分かりになる通り、手塚先生はああいう優しい笑顔をしてくださいます。徹夜明けでも顔を合わせた時には、本当にああいう顔をなさってくれるんです。ようするに、迂闊に「才能がある」と言っただけはいけないんですけれども、こういうレベルの人はすごいということを実感して、僕は努力ができない人間ですから、それを目指す気は全然ありません。こういう方の近くでお仕事をさせてもらって、ありがたかった。だけれども、『鉄腕アトム』というテレビシリーズでは、先生の仕事を汚すようなことしかできなかったということ、30年ぐらいたってハタと気がついて絶望しているというのが、僕の立場です。

<手塚>

もちろんファンの方はよくご存知だと思いますが、富野さんは手塚治虫のスタッフでした。つまり『機動戦士ガンダム』と『鉄腕アトム』というのが、両方富野さんの作品であるわけです。これが結びついているということ、ご存知の方は意外と少ないわけです。ちょっとイメージが違いますものね。

<さとう>

違いますね。

<手塚>

『鉄腕アトム』は手塚治虫の作品でしたけれども、テレビの演出のほうは富野さんがやられていて、富野さんの思いも入っていたということもありますので、その富野さんの思いを、皆さんはテレビでご覧になっていたかもしれないわけです。そのへんで、「アトム」からいかにして「ガンダム」なのかということも、後ほどまたお聞きしたいと思いますので、よろしくお願いします。

<さとう>

続いて荒俣宏さん、お願いします。

<荒俣>

荒俣です。富野さんのお話、僕もとても面白く伺いました。というのは、アトムだけを愛したわけではなくて、ほとんど手塚さんの作品を偏愛的に愛した少年時代だったからです。アトムはすごい。しかし、もっとすごいものがいくらかもあるというように、わたくしは思っておりました。手塚さんの本を、ずっと抱いて寝ていたことを覚えています。そのタイトルは『ジャングル大帝』です。単行本の形を未だに覚えています。『ジャングル大帝』が最初にあったので、今でも自然やジャングルのことが大好きなのは、その理由が大きいのではないかと思います。偏愛が高じて小学校の時にやったことは、将来はマンガ家になろうと思ったことでした。非常にたくさん、手塚の絵は真似をしました。とても真似しやすいんです。小学校の子どもでも、すぐ描けたんです。もうひとつは、僕が一番感情を入れたのは背景でした。他のマンガと比べると本当に歴然とするんですけれども、背景が全然違ったんです。僕が最初に気付いたのは、未来のビルの描き方でした。未来的なビルを描こうと思って色々なものを参考にしましたが、手塚さんのものを見てポイントが分かりました。何十階というビルの窓を全部描くんです。いかに高いビルかというのを表現するためには、窓を全部描かなければいけないんです。最初は30階建ての窓なので、窓を縦に30個分描いていたんですけど、そんなものは小さい枠には描けないんです。どうやって表現するのかと思ったら、1行は全部描くんですけど、後はもう点々に描くんです。「なるほど、こうやるのか」と、これでビルの描き方をマスターしました。もうひとつは海の描き方です。これが大問題で、海の描き方はいろいろなマンガを見ても、海らしいと思うのはひとつもなかったんです。手塚さんのマンガを見て「これぞ海だ」と思ったのは、手塚さんの海は全部油を流すんです。油が真っ黒になって、点々と浮いているんです。本来だったら、海の一部に真っ黒い斑点を付けて海を表現するというのは考えられなかったことなんですけれども、油で点々と描くという方法があるんだ、と。これを見て、海の描き方は面白いと思ってマンガにはまり、職業はマンガ家だと思ったんです。大学生までやっていたんですけど、案外マンガって、採用してくれないんです（笑）。あちこちに持って回ったんですけど、必ず「なかなかよくできているから、次回作で考えよう。次の作品を描いてらっしゃい」と騙されて、大学までたぶん10数作描いたと思います。これはだめだと思って方向転換をしたんです。もうひとつ、今日のテーマになると思いますので今お話をしておきます。先ほど富野さんが『少年』のお話をしましたが、未来やロボットの作品は、『少年』はちょうどいい見本のショーケースのようなところがあったと思います。つまり、ロボットものはけっこうメジャーなものが載っていたんです。最もメジャーなのは、ちょっと後から出てきた『鉄人28号』というものです。ロボットのパターンというのはだいたい『少年』を読んだら分かったんです。時々江戸川乱歩の『少年探偵団』にも、今にも出るぞというロボットが出てきたりするわけです。二十面相がそれに化けて、中に入っていたりするんです（笑）。そういうようなロボットものは、人間が作った被り物のロボットもあれば、操縦をして戦争中の兵器開発の一部として作られたロボットもあり、そしてかわいいアトムのようなものがある。だいたい全部のパターンが『少年』の中にあっただけなんです。だから友達たちと、どっちが好きかと論争になりました。ほとんどの子は「アトム」と言うんですけど、中にはかなりユニークな子どもたちがいて「鉄人28号がいい。あのほ

うがロボットらしい」と言うんです。かわいいロボットとグロテスクなロボットというのは、二大イメージとしてそこにあったので、ロボットマンガは我々の中には、複雑な選択肢の多いジャンルとしてあったような気がいたします。

ちなみに僕は何かが好きだったかと言ったら、実はロボットではありませんでした。手塚治虫が描く「人工生命」が大好きだったんです。僕は貸本屋の中でたくさん読んで、やっぱり同じように、手塚の初期の赤本時代のものを読んでおりました。小学校1年ぐらいの時です。その中に出てくるキマイラ状態の合成人間に、とても興味を持ちました。たぶん、今の皆さんがあれを読んだ時に、多く感じるのと同じような、「これはちょっと怖い」という感じがあったんです。手塚マンガも初期のものは、そういうものを非常に大きく描いていたというので、ロボットもそうですが「生命とは何か」という問題を、とても手塚さんから学んだと思います。でも貸本屋マンガにあったのは、実はもっと刺激の強いマンガがたくさんありました。血みどろのものや暴力のもの、エロティシズムに溢れたものがたくさんありました。学校に持っていくと、必ず先生に取り上げられました。その中に混じって、手塚さんも取り上げられたんです（笑）。これは未だによく分からないんですけども、とにかくマンガというと「持っているだけで罪だ」という印象がとてもありましたので、その中の一部として手塚治虫があったんです。なぜ彼らが罪に問われたかというのは、大きくなるとよく分かりました。やっぱり大人の目線ということが、非常に大きかったんだと思います。マンガを読んで、今の子どもたちのように子どもとしてどう接したのではなくて、大人の感覚を学ぶために読んでいたんじゃないかという感じが、わたくしはとてもしておりました。だからなるべく早く大人になり、なるべく早くマンガ家になりたいと思っていました。

我々団塊の世代というのは、だいたい中学を卒業すると、半分は工場に働きに行きました。たぶん、僕もそうなると思っていました。だから小学校の時に、みかん箱を改造してマンガを描くテーブルを作りました。中学に入ったら2年ぐらい工場で働いて、夜はそのみかん箱の上でマンガを描いて、なるべく早くデビューしようと思っていました。マンガというのは、大人への一歩だったんです。どうも、子どもとして読んでいたのではないような感じが、わたくしはとてもしております。そのために、マンガを読んでいると、小学校では目の敵にされたのではないかと思っています。口では教育に悪いと言っていたんですけども、でも実はいろいろな真実や、学校では教えられないことがみんな描かれていて、そのために都合が悪くて、彼らは禁止していたのではなかったかと思っています。そういう中で、わたくしはマンガが大好きでありました。結果、今のような人間ができ上がったということだと思います。

<手塚>

荒俣さんがマンガ家を目指されていたというのは貴重なお話ですけども、もし、博識な荒俣さんがマンガ家になっていたら、また日本の技術は変わっていたかもしれませんね。ロボットというより人工生命が大好きだったというのは、これは非常に示唆的なご意見だったと思います。手塚治虫の作品の中のロボットというのは、ロボットなんですけど、どこかやっぱりロボットを超えているような部分があります。すべて何か人工生命的で、ロボットといえども、もっと生き物に近いというような表現をしているのではないかと思います。このへんがもしかしたら、今日のテーマに大に関わってくるのではないかと思いますので、また後ほど、そのへんのところを詳しくお話ください。

<さとう>

続いて大森さん、お願いします。

<大森>

事前の打ち合わせでは10分話すということで、「長いな」とみんな言っていたんですけども、超えますね、皆さん。僕くらいは10分で終わらせたいと思います。僕と手塚さんの関係と言うと、一番分かりやすいのは、『ヒポクラテスたち』という映画に手塚さんに出ただいたんです。そんなに大きい役じゃなくてゲストみたいな役なんですけど、キャストのところに「手塚治虫」と出ているから、何かすごい関係があったと思われるんです。映画というのはそういうふうに残るもので、すごいなと思っています。さっき眞君のほうからお話があったように、手塚さんが日本のマンガ文化を作り上げたというのは、確かにそうなんです。できるだけリアルタイムな話をしてくださいということなので、手塚マンガは質の高さと量の多さでマンガ文化を作り上げたんだと、歴史的に見るとそうなってしましますが、リアルタイムで生きてきたものとしては、非常に姑息な話ですが、手塚さんがもし医者で医学博士でなかったら、日本のマンガ文化というのは潰されていたかもしれないというぐらい昔はマンガは害毒でした。PTAや学校の目の敵にされて、「マンガなんか読むやつはろくな人間にならない」と言われている時に、でも手塚治虫と言う人は医者で、医学博士で、そういう人がマンガを描いているということで、マンガが潰されることを止められたんです。それも日本の文化風土の一面だと思うんですけども、「そういう偉い人が描いていたらいいの？」というところがあったんです。僕もマンガを読んだり、荒俣さんほどではないですけど描いたりしていたんです。うちの場合は父親が医者で、しかも大阪大学の医学部で手塚さんの先輩だったんです。「手塚さんは医者になってからマンガ家になった。だからマンガ家になりたかったら、まず医者になりなさい」という教育を受けてきたんです。そういうふうにご利用されたこともあるんです。そして、その通り我ながらなかなか立派なもので、医者になってから映画監督になるという、親に言われた通りのことをやっているんです。そういう学習効果。手塚さんが医者であり、偉い医学博士だったということが、マンガ文化に対してものすごく影響をしたという、皮肉な話かもしれないけれども、これは絶対、同じ時代を生きていた者、親から言われた者としては、それは身に染みて感じております。

僕と手塚マンガの出会いというのは、昔はマンガは月刊誌でして、月刊誌というのは、そんなにお金持ちの子ではない限り、1人月1冊と決まっていた。僕はずっと『少年画報』だったんです。『赤胴鈴之助』とかがあって、『鉄腕アトム』は『少年』だったと思うんですけども、ついに買わずじまいで過ぎてしまいました。その次に週刊誌になって『マガジン』と『サンデー』が出た時は、これもどっちかひとつ選べと言われて、『マガジン』を取ってしまったんです。手塚さんは『サンデー』のほうだったんです。僕はここでも、すれ違ってしまったんです。本当に出会ったのは、テレビで『鉄腕アトム』がオンエアされた時です。テレビのアニメで『鉄腕アトム』をやるといった日は覚えています。30分ぐらい前からテレビの前に座って、他のチャンネルに取られないようにして見た覚えがあります。60年代はずっとそういう感じで、本当の手塚マンガに出会うのは、実は70年代に入ってからです。親の言い付けを守って、医学部を目指して浪人ばかりしていたんですけども、その頃に読んだのが『きりひと讃歌』で、これを読んで「医学というのはこういう面白い、ドロドロした世界だ」と思ったんです。入学してからはリアルタイムで『ブラック・ジャック』を読みながら医学の勉強をしていたという、学生時代を過ごさせていただきました。そこで、手塚さんがライフワークとしております『火の鳥』と出会うわけです。「未来編」「宇宙編」のあたりで手塚SFのすごさ。それと映画が好きだったので、スタンリー・キューブリックが『2001年宇宙の旅』の時に、手塚さんを美術監督として使おうとしたというのが、ものすごく影響を受けました。そんなこんなで現在に至っております。今日は科学の話なんですけれども、柱立てになかったので、医学の話の時に呼ばれると、もうちょっとお話できたかと思えます。医学も科学のひとつですから、そういうことの中で、今日はお話させていただこうと思えます。

<手塚>

今おっしゃっていただいた通りで、医学の話も、後ほどもうちょっと突っ込んだ所をお聞きしたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

<さとら>

続きまして石上さん、お願いします。

<石上>

私の父親も、実は医者でございます。私の場合は、親父が「あまり仕事として儲からないから、おまえは継がなくてもいい」みたいな雰囲気がありました。ところが、大森監督と同じ、私たちの仲間に、手塚ファンの大林宣彦監督がいるんですけども、これがまた親父さんが医者だということです。なんか関係があるのかなという気がいたします。ちなみに私の知っていることをひとつ補足しますけれども、荒俣先生のマンガというのは、すごいですよ。何かで一度拝見したんですけども、どうしてこれでマンガ家にならなかったのかという、そんな作品です。ただよくよく見ると、ご当人もおっしゃっていたように、背景その他というのに懲りすぎなんです。印刷技術で、できることをフルに駆使してやってしまうというくらい。逆に言いますと「これでは時間がかかるだろう。仕事にならないだろうな」というのが、私の印象でした。以上、補足です。私はこの中で一番年長になってしまいましたけれども、私と手塚作品との出会いというのは、確か今度初めて復刻されるという、最初の本格マンガ『新寶島』です。ちょうど戦争の最後の頃に、私の一家は田舎に疎開していたんです。本当に田圃のど真ん中なんです。そういう中にいて、仲間が持っているマンガ本を借りるわけです。先生方もおっしゃっていたけれども、大阪から売り出される「赤本」という、普通の本屋さんで売っていないマンガです。貸本屋さん置いてあるとか、お祭りの夜店で売っているとか、そういう感じのマンガ本です。いわゆる中央から出版されている雑誌の『少年倶楽部（少年クラブ）』その他という、そんな出版社とはまったくレベルの違う、言ってみればおもちゃの類です。たまたまそんな田舎で出会えたというのは不思議でしょうがないんですけども、よっぽど運が良かったという気がして仕方ありません。夢中になりまして、この「てづかおさむし」という人は一体なんだということで、次の本を探したんですけども、田舎ですからそんなにあるわけがないんです。それで小学校に入りまして、仲間ができて、マンガをそれぞれ持っているという情報がそこで出てくるわけです。そんな話の中で「俺も1冊持っている」となり、それで借りに行くんです。もう野越え山越えというそんな感じで借りに行って、やっと2冊目は『魔法屋敷』という作品だったんですけども、1年後ぐらいだったような気がします。そんなふうに、とにかくこの「てづかおさむし」という著者のマンガ本に非常にこだわりまして、どうしてこんなにこだわるのかと分からないままずっとこだわり続けまして、大人になってしまって、まだマンガを読んでいる。今だからそんな話、普通ですけども、大人がマンガ本なんかは読まない頃でした。もちろん私もマンガはもう読まなかったんですけども、手塚治虫作品だけは別で、新刊が出るとすぐに買ってきて、電車の中で読んでいて周りの人々に笑われました。特に若い女性に笑われたのが、非常にショックでした。つまり、大人になってもマンガを読む第1世代、『新寶島』から出発してしまった第1世代がかく言う私です。

「一体あの衝撃はなんだろう」ということをずっと考えながら、大人になって改めて「手塚治虫論」ということをやろうということで書きました。短い文章では、それまでも新聞や週刊誌などにも手塚さんのすばらしさに触れた記事が出ていたんですけども、丸々1冊の本というのは、たぶん私がまとめた『手塚治虫の奇妙な世界』というのが、最初ではないかと思えます。それで私がここにいるのではないかと思えます。この本は、売れ行きはともかく、大変幸せな本でして、都合4回出版されました。手塚先生があちらの世界に行かれてしまった時に、「手塚治虫の時代」という名前に変えて再出版されました。その次はまた『手塚治虫の奇妙な世界』に戻って、文庫化されています。その次はまた大型の本になって、それまでに書いたほかの文章も入って「定本手塚治虫の世界」という名前になって、「奇妙」が取れたんです。この「奇妙な」というのが皆さん不思議に思うんですけども、特に手塚治虫さんの、あの

不思議な個性を他に表現しようがなく、全体をひっくるめて「奇妙な」と付けた記憶があります。そういうことを繰り返しながらずっと手塚作品に触れてきたんですけど、今逆に思うと、『新寶島』の衝撃からずっと辿って来た手塚作品のすごさを一言で言ってしまうと、やはり「ドラマがある」ということです。子ども相手のマンガにドラマは必要ないはずだったんです。なのに手塚作品は厳然とドラマがあるということが、やっぱりすごさかと今は納得しております。

一方においては、絵の面白さ。荒俣先生もおっしゃっていたけれども、とにかくかわいらしくてかっこよくて、すぐ真似したがるということです。私も真似したクチです。これは、手塚さん以降のマンガ家の若手が、みんな手塚マンガから出発して、その模倣から始まったということです。石ノ森さんも藤子さんもそうですが、一番面白いのは、白土三平さんという、タッチがまったく違うマンガ家がいらっしますけれども、むしろ劇画家と言ったほうがいいのかもかもしれませんが、白土さんの非常に初期の漫画は、なんと手塚調なんです。そのぐらい、絵としての手塚治虫というのは、まずこの国のマンガの風土を変えてしまったというぐらいのすごさがあります。「絵」と「ドラマ」のあたりが、今日のテーマである「科学」とどういう関係があるのか、自分でも考えて行きたいと思います。

<手塚>

ありがとうございます。今、最後に石上さんがお話になったように、とにかく手塚治虫というのは、日本のマンガやアニメすべての歴史の元になっております。皆さん、語りたことはたぶん山ほどあると思いますけれども、語りだすと何時間もの討論になってしまいます。今日はこの中で絞り込んで、医学を含めての科学。その中でもっと絞り込んで、アトムを中心にしたロボット技術は一体何を表現していたのかと話を持っていければと思っています。珠緒さんは、『鉄腕アトム』はどこで最初にご覧になりましたか？

<さとう>

アニメですね。

<手塚>

それはカラーですか？ 白黒ですか？

<さとう>

カラーです。

<手塚>

カラーですよ。世代としては、たぶんそうだと思います。皆さんご存知だと思いますが、『鉄腕アトム』は今まで3回、テレビでアニメ化されております。そして今日のパネラーの皆さんはたぶん、その最初のアトムをご覧になって、富野さんはそれを作られていた。意外と、その当時原作を読んでいたという人は、今ほど多くはないんです。ですからその当時でも、原作の『鉄腕アトム』をちゃんと読んでいましたという人は少なかったので、テレビのアトムの印象のほうが強いのではないかと思います。ただ改めて原作を読み返してみると、やはりテレビとはずいぶん違うところもいろいろあるんです。イベントの最初でアトムの印象は「かわいらしい」と珠緒さんがおっしゃっていましたが、かわいらしい絵の印象というのは確かにあるんですが、実際のマンガの中で、どのようなことが表現されていたのかというのを、今一度皆さんと一緒にスライドを見ながら、そのへんのお話をしたいと思います。パネラーの皆さんも、途中で何かご意見がございましたら、そこはご自由にご発言くださいませ。

もちろん、アトムというのは非常にエポックメイキングな、手塚治虫の中でもエポックメイキングな作品であったと思いますが、それ以前にも、先ほど富野さんがおっしゃられていたように何作か、あるいはかなり多作に、科学の未来を描くようなSFマンガを描いております。今だと「SFマンガ」と言いますが、当時は「空想科学マンガ」でしょうか、SFという言葉はなかったと思います。そして初期には、今やファンの間では「初期SF3部作」と言われています、非常に人気のあった作品があります。まずその絵を見ていただきたいと思いますので、明かりを落としてスライドをお願いいたします。

(※スライドでの解説がありましたが、割愛させていただきます)

<さとう>

ではこれから、フリーディスカッションのほうに。

<手塚>

若干時間が短くなりましたが、フリーディスカッションということになります。まず富野さん。先ほど少しだけ振りましたけれども、富野さんは「ガンダム」という、近代のアニメの中ではひとつのエポックメイキングを作り出してしまったわけですけども、アトムの演出をやっていた時に思っていた、未来というものに対するドラマや、ストーリーと、その後に生み出されたガンダムは、どのように繋がって行かれたんでしょうか。

<富野>

作品を作ることができるかもしれないと思った時から考えていたというのは、嘘になります。『鉄腕アトム』を演出していた頃、それから『鉄腕アトム』のテレビ版の作品の何本かは自分のオリジナルストーリーで、勝手に演出をしてしまったものもあります。そういうことをやっている時には、今ここで話されているように、アトムについて「悩むアトムくん」、つまりロボットということを、一切考えていませんでした。考える必要もなかったと理解しています。その理由は先ほどもチラッとお話した通りですが、手塚マンガはエロ本かもしれないと思っていたということの「エロ本」という言葉を思いつかなかったのとまったく同じことです。基本的に、ドラマを作る上では人間でなければ成立しないと思っていましたので、ロボットの性能論・機能論ということは一切考えないで演出をしていたという記憶があります。なぜそういうことが許されていたかと言うと、「マンガなんだもん」だからです。テレビシリーズとして、番組として成立する要点だけを満たせばいいというふうに、本当に割り切っていました。当然それはバカな理解です。考えが足りないところでやっていることだということも承知していました。ただ「マンガだから」「かわいいキャラクターだから」「鉄腕アトムだから」です。アトムだけが動いて、1話完結の物語らしいものがあれば、商売になってしまうということで、全部逃げ切りました。そういう現場と、こういうふうにご覧になってお分かりになる通り、作者である手塚先生の立場の中では、実はロボット論もあり、ロボットが生命体に近づいてきた時にどうなるのかということ言えば、手塚先生の中に解答がまったく見えなくなっているというプロセスが、『鉄腕アトム』の中に厳然としてあるわけです。

先ほど荒俣先生がおっしゃった『ジャングル大帝』のほうに、もっとすごい大問題があります。人種問題と、動物が動物を食べざるを得ないということ。つまり、ライオンが肉食主義者になり得るのかという問題で袋小路にはまったという問題が露見したのが『ジャングル大帝』なわけです。ですから、やはりその部分には、僕自身の気分を投影することが一切できませんでした。できなかったけれども問題なのは、浅慮でありながら「アトムがかわいければ」ということが、絶対的に「善」になってしまうんです。実際に、今度、科学論で考えた場合、今ご紹介いただいたように、あれだけいろいろなものを「たかがマンガ」の中に投入して、物語を作らざるを得ないとか、作りたいと思った手塚治虫というのは、一体なんだったのかということです。その問題を考えた時に、自己撞着が起ころうが起ころまいが、とにかく一度物語りにしてみるということで、みんなで考えようというフィールドを提供したのではないということだけは、感じるようになりました。

僕の場合は、だからなんでしょう。本当の意味での「自立型ロボット」というものに、基本的に解答が出ないということがありましたので、人が乗る乗り物以上のものには絶対にしない、したくないというようにしたんです。ガンダムを作った時の一番の衝動というのは、「あれは機械である」ということ以上に、絶対に波及効果を及ぼさないというようにしたのは、アトムのトラウマがあったことは事実です。そのことには、もうひとつ理由があります。科学というものの発想というのは、ある時とても極端に、先鋭的な出方をするわけです。これは荒俣先生、石上先生などはご存知だと思いますけれども、SFという未来を予知するフィクションは、バカな話です。フィクションの中でいろいろなことをやると言いながら、1960年代から70年代の中頃まで、SFがひとつだけ予言できないことがあったんです。これは伝説的な有名な話ですが、ごみ問題を予見することができなかったんです。それなのに「タイムマシン」や「物質転送機」などと言っている人間の想像力というのは、かなりめでたいものではないでしょうか。そうすると『鉄腕アトム』や『ジャングル大帝』が自己撞着を起こしている問題、絶対に解決に至らない問題というものを突き詰めていった時に、「科学というのは絶対に人類を滅ぼすところまで行く」というまで想定できる部分があります。ですから、たかがマンガ家のエロマンガ家が描いたような物語なのかもしれないけれども、そこには実を言うと、根本的に科学と人、生命体の問題というものを、手塚治虫という方が医学を専攻したばかりに、いやでも投影する作品群を提供してくれていたんです。実はこれが、一番大きな財産なのではないかと思っています。これ以上の話は、今は差し控させていただきます。

<手塚>

ありがとうございます。荒俣さん、今のお話を受けて、生命と科学の関係というものはいかがですか？

<荒俣>

今の映像を見せていただいて、やっぱり後講釈のいくらでもできる絵ですね。こんなに後講釈ができるのかと、今さらながら思いました。僕は今の富野さんのお話を、別の形から語りたくです。普通「科学と技術」と言いますが、実はそんなに関係がないんです。科学は確かに技術の役に立つけれども、科学なんかなくても技術はとりえずどんどん進歩する可能性はあったし、現実にあつたわけです。例えばパソコンなどを使って、政府が盛んに使っているグラフや統計表の資料などは、数学者が実用化したわけではないわけです。これで一番役に立ったのは、ナイチンゲールが「人間が戦場で一体どのぐらい死んで、どのぐらいのベッドを用意すれば戦傷者を収容できるのか」という、今の日本の病院たらい回しの問題を彼女は既に考えていたんです。どのぐらいの病院を作ってくださいという資料のために、一生懸命戦場に行って、戦死者の数を調べ、きれいなグラフを作って「これだけいるでしょう。だからクリミア戦争には、このぐらいの病院が必要です」というアイディアに使うわけです。別に数学をやったから、やっているわけではないんです。技術というのは、そういう要素がものすごくあります。

ロボットに関して言うと、今アトムを見ていて、盛んに「かわいい」というお話がありましたけれども、これは後講釈的には非常に良いサンプルだということが分かったんです。というのは、ロボットというのは元々かわいいものを目指して作られていたんです。西洋のほうでもそうですが、「ピグマリオン伝説」などがある通り、東洋はもっと分かりやすいです。漢などの古い時代から、中国

ではロボットの話はたくさんあるんです。どんな用途のためにロボットを作ったかという、だいたい同じなんです。空を飛ばすとか、夢を実現するための機械というものもあるんですけども、だいたい美女、あるいはイケメンを作るんです。何をやられるかという、イケメンと美女に歌と踊り、セクシーなポーズを取らせるんです。ほとんどのロボット製作者は、このために作るんです。つまりアトム的一面であるかわいいものを作るために、作るんです。

隣にある韓国でもまったく同じです。韓国ではグーテンベルクよりも数百年早く、活字を使った印刷物を作るんです。これは別に、印刷物をたくさんの人々の手に渡すというのではなく、それまでは手で写していたので間違いがあまりにも多くて、ある原典を完璧にコピーするための技術として、活字を作るわけです。印刷したかという、ほとんど印刷していません。たった1部か2部を印刷して「間違いがない。これ活字の組版ができた」で、つまり機械が完璧であるかどうか、なんです。その上に、完璧にかわいいかどうかという付加価値を付けるんです。そのかわいさの問題というのは、同時にエンターテインメントに大変繋がっているんです。

今も話したように、中国のロボットはイケメンと美女なんですけれども、これを何に使ったかと言ったら、ほとんど戦争に使うんです。いざとなった時は砦に入れられて、周りを囲まれてどうしようもなくなった時、これを砦の頭に出すんです。それで踊りを踊らすと、相手の将軍の奥さんがそれを見て「あんなきれいな女性が砦の中にいるのなら、これはやばい。これを占領して夫があれを見たら、きっとあっちになびくに違いない」と、実際に中国の史実に書いてあるんです。奥さんが「あの砦はほったらかして退却」と言うんです。イケメンのほうもまったくそうです。将軍が暇でしょうがないので、何とか楽しいことはないかということで、全知能を集めて作ったのがイケメンロボットなんです。かわいいというのを別の言い方で言えば、「エンターテインメント性」か、あるいは「まったく役に立たない」です。実際のものには役に立たないというものを作っているんです。

日本も最初に作ったロボットの話は『今昔物語』に載っています。これはすごいです。田んぼの側に、今で言うお茶汲み人形のようなものを作るんです。そうすると子どもたちや大人たちが来て面白いと、みんなのせるんです。お茶汲み人形はお茶をのせるけれども、日本人が最初に考えたのは、そこに水を入れて水が溜まると、ししおどしと同じように、カタンと田んぼに水を入れるんです。エンターテインメントの振りをして、実はそういう効果を与えるというロボットが、ずっと作られるんです。だから「かわいい」というのはロボットのある一面で、そのために人々が作り出した技術というのは、特に東洋では多いんです。先ほど『鉄人28号』の話が出て来ましたが、グロテスクなロボットが一方にある。なぜグロテスクかという、東洋人でなく西洋人が、おっしやっただけ、あれは機械だからです。西洋人はどういうわけか、機械はグロテスクだと思っていたんです。おそらく、人工生命のひとつの運命みたいなものもここにあると思います。ところが、19世紀の終わりぐらいに、このイメージを変えようとする技術者が出てくるんです。ロボットもそうですが、科学をベースに置いた技術で作ったものは、エンターテインメントに使わないで、だいたい産業に使うんです。これを何とか人々に受け入れてもらう方法はないかと考えるんです。ここで初めて、新しい機械の美学というものを提示するんです。その最たる例が「エッフェル」なんです。

パリに造ったエッフェル塔は、皆さんご存知の通り、100年間「ださい」「汚い」「パリから撤去せよ」と言われていたんです。その理由は、今お話したような、用の美は、機械に使えるものというのは美しくないんです。理由は単純です。表面に全部の金属構造があるように、装飾になってしまうのできっちりとしたデザインができないんです。エッフェルがそれについて非常に怒った事件があります。アメリカが独立をした後、いろいろなプレゼントをした時に、大きな自由の女神像などを提示するわけです。エッフェルにも、人々が集まって中で楽しむような像を作ってくれと言われて、女神の像を作るわけです。エッフェルが担当したのは、中の構造なんです。これはものすごく重要で、中にエレベーターなどいろいろなものを入れて上まで運ばなければいけないから、これがしっかりしていなければこの像は建たないわけです。それを作ってアメリカに建てたところ、人気はうわべの装飾性に全部行ってしまい、「女神のこういうポーズがいい」と、エッフェルの「エ」の字も出てこなかった。これで怒ったわけです。「一体この人間は何を考えているんだ。機械でこんな美しいものを作るという、しかも装飾的な美しさだ。画家のようなイメージを考えているのでは困る」と言われたので、「分かった。こんな装飾は全部剥ぎ取って、しかも見て美しいものを建てる」というので、エッフェルタワーを作るわけです。やっと100年ぐらい経ってから、これもわびさびだという感じになってきたんです。

これがひとつの、グロテスクなロボット・機械と、かわいいアトム的なものの、技術・科学的な、DNAの中に入っている、ひとつの人間の傾向をよく表しているのではないかと思うんです。今の映像を見ていて、本当にそういう感じがしました。しかも、もうひとつ面白いのは人工生命という話が真さんから出たんですけど、最後は成長しますし、これを見ていると確かにそうです。よく考えてみると、天馬博士がアトムを嫌いになったのは、成長しなかったからです。さらにすごいのは、確かサーカスに売ってしまうんです。これは日本人・東洋人の発想と同じです。役に立たない、成長しないロボットは、サーカスでイケメンとカワイコちゃんの要素だけで勝負しろということを言っているんだというのが、手塚さんはたぶんそんなことは思っていないんだろうけど、後講釈で分かってしまったんです。中国のロボットの役割をそのまま、残ったアトムに託したという感じが、とてもしています。しかも面白いのは、この人工生命を作るのは「お父さん」なんです。お母さんじゃないんです。おそらく、人工生命と普通の生命の大きな分岐点で悩むのは「お父さんが作った子ども」だということが、アトムが悩むひとつの理由でもあるのではないかと思います。つまり創造主が見えてしまう。我々は一生涯、誰が作ったか分からないので適当なファンタジーを作れるんだけれども、作ったのはお父さん。お母さんなら、腹から出たというひとつの神話を作れるんだけれども、お父さんが頭脳で作って、しかも何かさせようという発想の人工生命のやりきれなさというのが、今の映像でアトムの顔などを見ていて、わたくしはとても実感をすることがありました。

<富野>

今のお話で、「お父さんが作る」というところが、実を言うと技術の問題だということに、今僕は気が付きました。つまり女性性でない部分で作るからこそ、理念的に技術だけが特化していくものができ上がってしまうということです。その具体的な例を2つだけ挙げておきますが、分かりにくいと思うので考えてください。「原子爆弾」と「原子力発電」です。技術がどう社会に受け入れられるかということを考えないで、男たちが勝手に作ってしまったものです。作った後で、使い方が分からなくて大騒ぎしているというのが、例えば原発でいえば、核廃棄問題として現れています。放射性廃棄物をどうするかということは何も考えないで、平気で発電に使っているんです。今のこの電力の3分の1が原発です。だから、技術がなんかいびつだと思ったのは、お父さんだけが作っていたからだ、今本当に分かってきて、びっくりしました。だからガンダムは僕に作れたんです。

<手塚>

今、かなり深い所まで話が行きながら、面白い方向に展開していますが、アトムのかかわいさに、実は日本のロボット技術の鍵が隠されているという話が出て参りました。その話を続ける前に、手塚治虫がどのぐらい科学に詳しかったのか。今お話があったような事実を知った上で描いていたのかというと、たぶんそんなことはないと思います。その時の直感的な思い付きと、今まで自分が培って来た絵が、たまたまロボットというところに合体して、ああいう形として出て来たという気がします。その前に、その直感の中には、もしかすると日本人としてのDNAということがあったかもしれません。

直感でもう少し具体的な話として、医学博士であった手塚治虫がどのぐらい科学技術ということに長けていたかという話ですが、例えば、今の時代はパソコンがあります。手塚治虫が、もしこのパソコンを触ったら何ができたかと皆さん考えるでしょう。

<さとう>

いろいろできたんじゃないですか？

<手塚>

すごいことができたように思うでしょう？ 僕の意見は、何もできなかった。と言うよりも、パソコンは触らなかったと思います。

<さとう>

そうなんですか？

<手塚>

実は、僕もパソコン音痴なんです。

<さとう>

えー！？

<手塚>

これを言うと、みんな「え？」と言うんですけど、メールもちゃんと送れないぐらいの人間なんです。実は、機械を扱うというのは非常に特殊な技術だと思いますが、手塚治虫は非常に機械音痴でした。ですから、新しい物好きで新しい機械をすぐ買ってくるんですけど、触れないんです。

<さとう>

意外です。

<手塚>

例えば、免許も取れなかったんです。車の運転も途中で挫折してしまうんです。とにかく機械を触ることが非常に苦手な人です。現実に家庭でよく起きた問題としては、ビデオの留守録が設定できないんです。ちょっとかわいい話です。そのぐらい、機械というものに対してはまったく触れない、できないというところがありました。先ほど「科学と技術は関係ない」と荒俣さんのお話にありましたけれども、手塚治虫の中ではまさに、科学的発想と技術は分離していたというところがあります。ですが、医学博士ではありません。

今度は科学から医学を捉えます。大森さん、手塚治虫の医学マンガは、実際医学なんですか？ 『ブラック・ジャック』はある程度読めてしまうんですけども、それは医学的に知らないから読んでいるんでしょうか。

<大森>

それも含めて、次に話す機会が回ってくるかどうか分からないので、まとめて話しておきます。

アトムの特徴のひとつは「二足歩行」ということではないかと思うんです。ホンダが作っている「ASIMO」は二足歩行ができるようになっていますが、日本のロボットは、二足歩行ができるように必死になって研究・開発しているように見えるんです。それは本当に、ロボットにとっては重要なのかと思います。「初めて、人間のように二足歩行ができるロボットができました」とすごい成果のように言っているけれども、これは鉄腕アトムのトラウマが日本のロボット開発技術者にとって、ロボットというのはああいうふうに歩かなければいけないんじゃないかというところがあるんじゃないかと思ってしまいます。二足歩行に費やす労力を他に回せば、歩けなくてもベッドの横にいればいい医療ロボットなど、もっといろいろできるんじゃないかと思うんです。ほんとに、日本のロボット技術を、手塚さんがトラウマにってしまったとしたら、少し残念なところもあるんですが。ほんとは、そんなことないのかもしれないかもしれませんが、それでも、手塚さんにとってアトムというのはロボットではなく、人間だったんじゃないかとは思っています。

アメリカ映画『禁断の惑星』に出てくるロボットは、二足歩行ではないですね。みんな車で動きます。手塚さんもさすがに後年の「ロビタ」というロボットは歩かせていない。アトムは人間で、手塚さんにおける本当のロボットというのはロビタではなかったかと思うんです。もうひとつ言うと、「天馬博士とアトム」の関係というのは、実は、「ブラック・ジャックとピノコ」の関係じゃないかと思っています。実はブラック・ジャックの中にアトムが出て来て、僕は、それはピノコじゃないかと思うんです。ピノコというのは、胎内から人間のいろいろな部分を集めて人間にしているんですけど、半分ロボットのような、半分人間のような。これが『鉄腕アトム』以降の、手塚さんの「人間が作った生命」という意味で、アトム以降の手塚マンガに出てくるアトムというのは、実はピノコではないか考えているんです。

ロボット論よりも、そういう意味でアトムとピノコに共通しているのは「科学技術論」です。人間が作る科学技術で生命体を作ることなんですよ。手塚さんのこういうお話の時に、いつも「科学は人類を幸せにしたか」など、科学技術が主語になっているんですけど、この考え方というのは手塚さんに相応しくないのではないかと思います。手塚さんが終生考えていらっしまったことは、主人公は人間だと思えます。人間を主語にすると、「人間が科学を手にした時にどうなるか」という考え方の中で、もう一度問題を考えていかなければいけないのではないかと思います。「人間が科学を手にするによって」が手塚さんの最大の問題で、「人間は科学を手にする事で神になれるか」ということなんです。人間は科学技術によって「創造主」となるか。これは富野さんがおっしゃっていた、手塚さんが解決しなかった問題だと思えます。手塚さんはそこで、結論を出していないと思うんです。科学技術がものすごく進んでいって、それを人間が手にしたら、人間は本当に神になれるんだろうか。たぶん、なれないという結論は出ているんだけど、ひょっとしたらなれるのではないかというところまで考えたんじゃないだろうか。猿田彦博士が人工生命体を作っていて、変なものばかりできてくる。これではだめだということで、本当のたんぱく質を海に流してもう一度進化を始めからやってみようというのが、『火の鳥』の「未来編」に出てきます。あの主人公は人間だったんですけど、何千年何万年生きて、体がなくなって神になっていくんです。あれは、ああいう形でしか神にならないであろうという、手塚さんが出したひとつの答えだったと思います。そういう意味では、「人間が科学技術を手にした時に本当に創造主になれるか」というテーマが、『鉄腕アトム』の始めからずっと、手塚さんの中にあっただというように思います。

<手塚>

ありがとうございます。医学の話にはあまり触れられませんでしたけれども、後でお時間がありましたら、またお願いします。石上さん、今までお話を聞いて来られて、今まで考えていらっしまった手塚治虫と、どうでしょうか？

<石上>

先ほどスライドで見せていただいた、いわゆるSF3部作とアトムですが、「手塚治虫あるのみ」のファンにとって、実はアトムというのはたいしたことではないんです。むしろ当たり前なんです。これはさっきの話に繋がると、SF3部作にはあってアトムにないのは、「エロ」です。でも、そういうことはできないということで手塚先生は、例えば、ウランちゃんというカワイイ妹を出して、お兄ちゃんと一緒にパンツ一丁にしている。あれはもう、エロじゃないですものね。私は「ウランちゃんを出すあたりでもうやる気がなくなった」というお話を聞いております。

技術・科学のことですが、SF3部作の、特に『来るべき世界』は、のっけから「人類は発達しすぎた技術のために、自ら滅んで行くのではないか」とあって、そのことで最後まで締めくくられているんです。SF3部作のすごさは、このことに尽きるわけです。その技術の進歩を、SFの形でどんどん描くだけけれども、概ね悲劇的なドラマを展開していくんです。これは手塚さんの一番貴重で大事な部分ですが、それを置いてしまうから、後はエロができたわけです。「エロ」と言うのはエロマンガのエロと思われがちですが、それは大人の感覚です。エロティシズムのエロ、子どもにも関係あるエロです。男と女がいて人類が存続して行くという、基本的なことのための「エロティシズム」。「男と女」「生殖」「子孫」「人類の未来」などということ、私は後々に、手塚治虫の大きなドラマと捉えていくわけです。

ちょっとここだけの話ですが、では手塚先生が、実際に「男と女」「子孫」「存続」などということをどのように捉えていたかと申しますと、よくお話をなさったのは、「あのね、子どもを作るなんて簡単なことだよ。1分ぐらいチョコチョコとやればできちゃうもんね。つまらんもんだよ」ということでできた作品が、向こうに座っている眞君です。

<手塚>

1分で作られたそうです。

いま、石上先生からお話がありましたけど、これもよく、本人が生前発言していたことです。「『鉄腕アトム』というのは、それほどすごい作品じゃない」ということは、実は再三、弁解的に話していたことがあります。言葉をひとつ拾ってみますけれども、「僕はアトムを、僕自身最大の駄作のひとつと見ているし、あれは名声欲と金儲けのために描いているのだ」。

<さとう>

え？ はっきり。

<手塚>

はっきり、こういうことを言い切っています。全部が本心ではないと思います。やはり、わざと言っている部分もあるんじゃないかとは思いますが。

<石上>

言い忘れかもしれませんが、SF3部作というのは赤本ではありませんが、赤本と同様に大阪のほうから出版されています。『鉄腕アトム』になってくると、これは手塚先生が東京にいらっやって、東京大手の出版社との係わり合いで生んでいく作品の代表作です。いわゆる初期の手塚治虫ファンというのは、私の周りにはいないんです。『鉄腕アトム』のあたりになって、手塚治虫ファンが一般的に増えていくんです。でも「連載していても、ヒットという意味では1番手ではなくいつも2番手3番手なんだ」と、手塚先生がよく言われていました。荒俣先生もおっしゃっていた武内つなよしさんの『赤胴鈴之助』や福井英一さんの『イガグリくん』など、大ヒットする作品というのは別な作家で手塚治虫じゃないんです。そのぐらい、手塚マニアの少年たちと一般的な手塚治虫ファンとの差というあたりが、極めて大きく、ずっと続いていくんです。その辺の違いというのが、私にとってはエロティシズムであり、言いようがないのでかつて「奇妙な」という言い方をした、手塚先生の「在り様」だと思います。

<手塚>

昨日も評論家の呉智英さんが、手塚マンガの中には一種のインテリ性、ちょっと難しいところがあったとおっしゃっていました。その中に、難しい言葉ですが「エロティシズム」というものが、非常に重要な問題として潜んでいるというのもまた、大人らしい意見です。もちろん、本人はそこまで意識しては描いていなかったと思います。

今日皆さんのお話をいろいろ聞いていると、アトムというのはもちろん代表作で、最初にアニメであったから、みんなとても知っています。でも、それが科学というものを押し上げたわけではない、と。本人自身はむしろ、科学に対して非常に批判的な目を持って描いていたということです。なおかつ、ロボットの開発や進化というのは、絵では描いてはいるんですけども、さほど興味がなかったかもしれないです。むしろ、人間同士の触れ合い。エロスという言い方をされていますけれども、肌の触れ合い、密接な触れ合いといったことを自分の中にものごく持っていて、描いていたのかもしれない。

その肌の触れ合いということで、もう一度大森さんにぜひお返ししたいんです。『ブラック・ジャック』はあれだけ人気のある医者のマンガで、大森さんも実際に学生の頃お読みになったということですが、『ブラック・ジャック』という作品は現代のお医者さんたちに、何か影響を与えたものはあるとお考えですか？あるいは、医学というものに対して、何か貢献された部分があると思われませんか？

<大森>

影響を与えられた人間が、医者じゃなくて映画監督をやっているのでだめなんですけど。現実的にどうなんでしょう。確実にいると思います。余談ですけど、手術する時などの内臓の絵が非常に上手かったのは、すごく参考になりました。僕ら医学生はいろいろスケッチさせられるんですけども、手塚さんの描き方を見て、すごく参考になったというのはありましたけど、もっと精神的なもので、さっきの「人間が科学を手にしたら神になれるか」と同じように、人間は美術・医学をどんどん向上させていったら神になれるかというところで、ブラック・ジャックというのはいつも悩ましいわけです。そのことというのは、心ある医者たちにとって一番問題なんです。今、ひとつの細胞からいろいろな臓器ができてしまうというそういう時代になってきた時に、ブラック・ジャックの中に時々「こうやって人間は神になっていくのか」と叫ばせていましたけど、ほぼああいうところに来ましたね。そういう意味では、僕らが読んだのは早すぎたのかもしれないし、今読むと非常によく分かるのではないかと思います。人間が医学で、DNAだ、生命だとやってしまっているうちに神になれると思ってしまふ、それでいいのかというのが、手塚さんが残された一番大きなメッセージではないかと思います。

<手塚>

先ほど「ブラック・ジャックとピノコ」の関係が、「天馬博士とアトム」だと言われましたが、言われて見て僕もああそうかと、先ほど気付いたんです。先ほど見たように、アトムというのは悩むロボットなんです。「なぜ自分はこんなふうに生まれてしまったのか」

と悩むんですけど、ピノコは案外悩んでないんです。生まれた時は憤っていますけれども、その後はブラック・ジャックの非常にいい補佐と言いますか、かわいいアシスタントです。

<大森>

でも、成長しないことには憤っているじゃない。あれはアトムと一緒になんです。

<手塚>

憤っていますけど、アトムほどの深い悩みはなくて、意外カラッと、次の瞬間には忘れていくぐらいの、本当にふっ切れた感じがするんです。だからもしかしたらピノコというのは、アトムがさらに精神的に成長した姿かと思うんです。アトムよりもさらにかわいくなって。

<大森>

女になっちゃった。

<手塚>

そうですね。女性そのものになりましたし、しかも自分の役割というものをものすごくよく分かって存在しているような気がします。富野さんもおっしゃっていたように、アトムは自分自身の結論が出ていないロボットです。いい意味でも曖昧なまま、ずっと続いて行ったというような印象を受けています。

<富野>

ただ今のピノコの件に関しては、眞君はそう言っているけれども、ちょっと違うと思っている部分があります。これは科学の問題ではなくて、作劇です。劇を構成するための人物配置の問題として考えなければいけないことがあるので、これは本当に面倒くさい話になるので、細かくは説明しません。手塚治虫という人が『ブラック・ジャック』を描くに当たって、ほとんど役に立たないピノコを置いているということで、基本的に人間の目指しているもの、触るべき技術論というものがどういうところにあるかということ、表すために、ピノコみたいなものを置かないとやっていけなかったという辛さのようなものがあつたのではないかと思います。僕はピノコというのは、手塚先生にとってだまし絵のような存在になっていると思うんです。こういうキャラクターを置かなければいけない手塚先生というのは、本能的に、科学と技術の問題を感じていることがあって、それでいて自分はマンガ家としてしか表現できない部分があるために、人の問題というのはこういうふうにおちゃらけるしかないのではないかと。だけど、ブラック・ジャックは実際に執刀するわけです。そして、ある人生に関与していくということをやって、その繰り返しをやっていかなければいけないという物語を作っていると思えるんです。あれはおちゃらかしのキャラクターだけれども、手塚先生の中では「ピノコがいなければ私は窒息してしまいます」という位置付けになっていると思うんです。アトムの成長でもないし、単純にカウンターとしてのセクシャリティを持った、アイドルでもないという意味で、心の中にある澁みみたいなものではないのかという気が、僕はします。だからそういうマンガを描いた手塚というのはすごいということです。

<手塚>

ありがとうございます。石上さん、今のお話を受けてどう思われますか？「ピノコとブラック・ジャック」の関係が「アトムと天馬博士」か、ということですが。

<石上>

ようするに最初からのテーマ「リアル・サイエンスに手塚作品は反映したのか」ということは、これはもう誰でも知っています。例えばロボット工学のほうだって、そういう手塚ファンの方がいっぱいいます。子どもの頃に手塚マンガ、特にアトムに接して成長なさって、技術畑に進んだという人たちというのは、でもここにいる4人とはあんまり関係ないんです。こちらは手塚治虫さんの表現、もしくは面白く伝えるという技術を、それなりに継承した4人なんです。もしもアトムを我々が読んで、その熱中力を科学のほうに置き換えていたらどうなのかという、そういう仮想はいくらでもできるんですが、残念なことに、もしくは幸いなことに、この4人はそうじゃなかったということなんです。テーマから外れてしまうかもしれませんが、そんなふうに思います。ですがやっぱり、自分の大きな枷（かせ）というか、自分なりのドラマを描いてゆく枷に、技術もしくは科学というものは置いていたのではないのでしょうか。そのために、子どもを相手にしなければいけないけれども、ものすごく大きな課題も背負ってらっしゃったというあたりの狭間の苦闘みたいなものを、そこから出発した、私たちがもひっくるめた様々な人間は、置き換えて考えてあげなければいけないという気がしてなりません。答えになっていませんが。

<手塚>

では、荒俣さん。

<荒俣>

今のブラック・ジャックの問題を真ん中に入れると、やっぱり手塚さんの家系がお医者だった。しかも大阪大学の前身であった「適塾」で学んだ。曾おじいさんですか？

<手塚>

そうですね。手塚良庵です。

<荒俣>

あの曾おじいさんのことを、手塚さんがどのぐらい関心があったかという問題と、大変絡んでくると思うんです。確かにアトム段階だと、初期のSF3部作と比べて具体的に科学と技術の話で言えば、科学がひとつの哲学の役割を果たそうとっていたけど、結局なんのことはなく、科学はそんなに役に立たないんです。技術も同じような運命を辿るんです。次に持ってこなければいけないのは、やっぱり医者としての哲学であり、もっと言えば、人工生命を含めた「生命」をどう扱うかという問題になってくるんです。曾おじいさんがいた適塾は、それで非常に悩むわけです。だから手塚さんは、『ブラック・ジャック』から『陽だまりの樹』までを描くというのは、非常に運命めいたところを感じるんです。曾おじいさんが学んだところは、緒方洪庵が作った「適塾」だったんです。適塾は何をやったかという、一生懸命オランダ語をやって蘭方医を育てようとしたんだけど、結局教えられるのはオランダ語だけだったんです。「オランダ語は読めるから、後は本を読め」というスタイルだったんです。洪庵は既にその段階で、わしは医学の最新技術を教えられないから、それを修得するための語学を教えよう、と思うわけです。あとは各自長崎に行ってオランダ人から直接学べと、弟子をみんなやってしまうんです。そうすると、弟子はそこで技術を学んで、先生の洪庵が知らなかったような最新技術で一生懸命治そうとするんです。一番成果をあげようとしたのは、コレラの流行を何とか防ごうとすることです。ですが、どうしてもうまくいかない。弟子は何人も、医者を辞めようとドロップアウトするんです。それは本当に『ブラック・ジャック』の話とよく似ていて、最新技術を持ってしても、結局命を助けられないものもあるし、場合によっては余計なことをやってしまうこともあるんです。後で、間違っていたと気付くことがずいぶんあるんです。

その中の関寛斎という弟子は最たるもので、「どうやったら医者が一番役に立つのか。医者を辞めることが一番だ」という結論を得て、辞めてしまうんです。何をやったかという、西洋の学問をどうやって学ぶかという教育はできると、やはり語学を教えたいんです。医者部分はなくなったのかと、これもちゃんと取り上げたんです。これは『ブラック・ジャック』の発想を考える上で参考になるかと思いますが、結局生命が健康に育つということが一番で、世代をちゃんと繰り返して、土地で育てて暮らしていく。死ぬ時には死ぬということで、北海道に開拓村を作るんです。それで一生懸命、毎日朝・昼ちゃんと働き、おいしいご飯を食べ、村でワイワイやり、時には勉強会を開いて、健康に暮らす。こう暮らすことができれば、もう医者は必要ない。間違いが起こる医術というのは、もしかしたら不要になるのではないかということで、理想村を作ろうとするんです。「私の考えが正しいかどうか確信できるには、私が残り余生を100歳まで幸せに暮らせればいい」と言って、80何歳まで健康に、みんなで村で働きながらやるんですが、こういう健康的な繰り返しの暮らしで、体と心を鍛えるということは面白くないと、息子が反対するんです。もっと大きな技術を入れ、大農式の農業を開いて、経済的にどんどん豊かになる。生活レベルをアップすることこそが、人々を幸せにする方法だと、お父さんを差し置いて大農式の農業を始めるんです。お父さんはそれを見て、絶望して自殺をしてしまいました。この関寛斎のケースは以上のようなストーリーです。結局医師を始めながら、大阪大学医学部の源である適塾の緒方洪庵ですら、医術というのはいつまでやっても仕方ないのではないかと悩んだ伝統があるんです。たぶん眞さんの曾おじいさんも、具体的にどういうことをなさったかは分かりませんが、相当苦しんだタイプの一人じゃないかと思うんです。

<手塚>

すみません。父親の曾おじいさんに当たります。私からは曾々おじいさんです。

<荒俣>

曾々おじいさんに当たるということですが、どういうことを考えたのか。それが、治虫さんが最終的に関心を持たれたということとの繋がりを見てみると、もう一歩さらに引いて、ブラック・ジャック問題は『陽だまりの樹』などを付け加えることによって、最終的に手塚さんが何を考えていたのかというのが分かるかもしれないという感じが、とてもします。人工生命が手塚マンガにいち早く取られ、キマイラであることの運命が描かれたことを考える上でもです。

これも不思議ですが、直感かどうか分かりませんが、手塚さんというのはそういうところへのアイディアのひらめき、方向の見通しというのが、手塚さんを追い詰めない、行き詰らせない動力のひとつだったのではないかと感じが、今お話を聞いて、とてもいたしました。

<手塚>

ありがとうございました。すごくいろいろな話が出て来て、どんどん聞いて行きたいんですけども、お時間のほうがだいぶ迫って来ています。打ち合わせをしていた時に、富野さんから「今日の話はまとまらない」と脅されて、「手塚君はどうまとめるつもりだい？」

と言われていたんです。この限られた時間の中で、どれだけのことをお聞きするかというのが、この会の趣旨でもあります。はっきりした結論はないのかもしれませんが。

ここで1回頭をブレイクする意味で、特別な映像を皆様にお見せしたいと思います。これは本当に、今日のサービスのつもりで持ってきました。本邦初公開の、現在ハリウッドで製作中の「ASTRO BOY (アストロボーイ)」という、フルCGの『鉄腕アトム』映画化作品でございます。その予告編です。本当に短く、1分ぐらいしかありませんので少ししか見せられませんが、ここで一般の方にお見せするのは、もしかしたら世界初ぐらいです。特別に借りてきた映像ですのでお見苦しい点があるかと思いますが、もしかしたらアメリカでは、明日ぐらいから映画館でお見せするかもしれないという映像です。短いですが、見ていただきたいと思います。明かりを1回落としてください。

(ASTRO BOY 予告上映)

<手塚>

以上です。

(笑)

<さとう>

すごーい！ きれい！

(拍手)

<手塚>

あの中には見たことあるような映像も一瞬ありましたが、実はこれを作っているアメリカのスタッフたちが、日本の過去の白黒版アトムに敬意を表して、わざとそれと同じ画面をCGで作って入れてあります。ですから、これはもしかしたら予告編だけの映像で、本編には出てこないかもしれません。地中をずっと掘っていくというあのへんが、オマージュの映像だということです。

<さとう>

あのパンチはすごかったですね。

<手塚>

はい。もちろん、これはすべてアメリカで作られておりますし、アメリカや海外のスタッフだけでやっております、日本側からは一切スタッフが入っておりません。アメリカ人の考えに基づいて作られている作品です。ですから皆さんが馴染んでいるアトムとは、多少違う表現が含まれているのではないかと思います。まだ完成している作品ではございませんし、今日お見せしたのも、まだ製作途中の予告編です。ですから色や質感、表現の一部が、まだ完成品ではないということをお断り申し上げておきます。富野さんはずっと睨んでいますけれど。

これに関しては、ものすごくいろいろあるかもしれませんが、今日はそれになるべく触れずに。これはまだ完成しておりませんので(笑)。アメリカでは来年10月に、全米3,000館で公開ということが決まっております。

日本はまだ正式に決定しておりませんが、それに近いところでお見せすることになるかと思えます。これは今日のお話の流れでどうなるかという、非常に微妙な映像だと思うんですが、はっきりしたことをひとつだけ申し上げますと、ここに出てくるアトム少年は、まさしく「少年」です。少女的な部分をなるべく廃して、彼らは作っているようです。そのアンドロギュヌス的な両性があるような部分というのを、アメリカでは押さえているというニュアンスだそうです。まだ分かりませんが、ここだけの情報です。

<さとう>

素敵なものをありがとうございました。

<手塚>

時間がすっかり来てしまいました。

<さとう>

最後に皆さんから。

<手塚>

まだお話し足りないこと、今日のテーマについても一言触れていただきたいということがございますので、お一方ずつご発言をお願いしたいと思います。

<さとら>

これからのことでもけっこうです。

<富野>

作家の立場で言えば直感でいいわけですし、リアルなものを追い求める必要はないから、それを花開かせていけばいいと思っています。手塚先生の場合には、冒頭でお話しました通り、日本が戦争に負けて、初めて日本人が体験する戦後というものがある中で、ともかく希望を持つしかないというメッセージをいただけたことは、間違いないと思います。そして、今見た通りです。日本発のキャラクターが、かつて第2次大戦で日本をメチャメチャに負かしたアメリカ人という別の文化を持った人が、このように触っていくのを見ていった時に、これはやっぱり技術論の問題ではないのではないかと考えています。そういう意味では作家的なもの、アーティスティックな部分が持っている直感が、未来に向かってとにかく生きて行きたい、生きるためにはどうしたらいいのかという模索を絶えずしていく、我々の「～ねばならない」という欲望という心があると思うんです。そういう心を摘み取って。とても大事であるし、我々の場合には手塚治虫という大変な方を手に入れることができたということ、もう1～2世紀は宝として残るのではないかと考えています。1～2世紀というのは、紫式部より行くか行かないかということを迂闊に言いたくないからです。

<手塚>

ありがとうございます。

<さとら>

荒俣さん、お願いします。

<荒俣>

一番スタートの問題であった「手塚治虫やアトムが、時代の科学精神などにどう影響を与えたか」という問題ですが、15年ぐらい前に、アメリカにロボット産業の最前線、研究の最前線を見に行っていたことがありました。どこでもいろいろなものをやっていたんですが、一番印象に残ったのは「SFを書いている人は、みんなベシミスティックだ」と言われたことと、二足歩行を一生懸命研究している人がいました。わたくしも、大森さんではないですけど「どうして二足歩行をやっているんですか」と、つい聞いてしまいました。そうしたら、答えが「二足歩行が一番難しい。だからみんなは手を出さない。誰も注目をしてくれない。二足で歩けたからと言ってなんだと言われる。だけど私は、何の因果かやっている」なんです。それを聞いた時に、手塚さんのアトムの位置付けというもの、とてもよく分かりました。日本はアトムがあるおかげで、みんな「アトムを作りたい」と言えば、二足歩行の、役に立つかわからない一番難しい問題を追及するための、言い訳や位置付けは必要なくなったんです。考える必要がなく、悩むのはアトムに任せておけばいいという精神作用は、最も大きかったです。これは、ほかの国にはありません。その時に、今日のシンポジウムが15年前にあれば、「うちにはアトムがいるから」と言い返してやれました。アトムがいるかどうかは、とても大きかったと、わたくしは今つくづく思いました。

<手塚>

ありがとうございます。

<さとら>

大森さん、お願いします。

<大森>

今こうして話していますけれども、手塚さんがアトムを描いた時に、そんなに深刻に、科学が人類を幸福にするとか、科学は善か悪かとかは考えてなくて、ただ面白いことを自分は考えられると。手塚さんのマンガにもありますけれども、「どうして俺はこんなにいっぱい思いつくんだろう」という、それをどんどん描いていっただけじゃないかと思うんです。そのクリエイティビティを誰も非難できないと思います。今になって、原子力を肯定している・否定していると言っているのは非常に酷な話で、今の目線で当時の批判をしてもしょうがないという気はいたします。ただ『ブラック・ジャック』の話から僕に聞こえてきたメッセージは、「医学は科学なのか」ということだと思えます。科学というのは、ひとつのボタンを押すとこうなるという法則性があるから科学であって、人の数だけ反応が違うという医学というのは、科学と言えるんだろうかというメッセージが聞こえてきたような気がします。だけど、ひょっとしたら科学というものもそうじゃないだろうか。ひとつのボタンを押したらひとつの答えが出るのが科学であって、それを科学だと思っているけれども、やっぱり医学の曖昧さと似ていて、どこかで、人によって不幸になることもあるし幸せになることもあるんです。そういうようなことを言うと、また富野さんに批判されそうなのでこの辺で止めておきます。

<さとう>

石上さん、お願いします。

<石上>

こういう場所に出席していつも感じるんですけど、手塚さんはすばらしい方ですけども、これ以上偉い人にする必要はないのではないかと思います。あの方は面白い人だったんです。こうやって喋るたびに思うのですが、手塚さんのお墓石を立派にするだけの伝え方をすることには、私はむしろ反対です。いかに面白い方だったのかということ伝えるべく、私たちはまだいるのではないかと思います。例えて言うと、チャップリンみたいな方だと思えばいいわけです。とにかく全身、自分の生涯まで使って人を面白がらせてきた。でもいつの間にか、やっぱりあのチャップリンも偉大な思想家にされてしまったという感じがして仕方ありません。私もできる限り、いかに楽しい方だったのかという話だけは続けたいと思います。ただ、どうしてそういう人になられたのかということは、ひとつだけ思い付くことがあります。私が手塚治虫ファンになった頃というのは、ご存知のように戦争に負けて、日本にほとんど何もなくなってしまった時代です。生まれた時には、既に戦争が始まっていました。ということは、信じられないでしょうけれども、私の世代には子どものための娯楽なんていうものはなかったんです。マンガはありましたが、前の世代の古いマンガでした。例えば『冒険ダン吉』や『フクちゃん』などを、親や先輩たちから受け継いで楽しんでいたんです。戦後に初めて手塚さんたちが登場してきて、本当に私たちの娯楽が生まれたんだと、ものすごい飢餓感がここでやっと消えるような思いをいたしました。これはとても大事なことです。では、その手塚作品とは一体なんなのかと言うと、もちろんのこと戦争前に始まるわけです。様々な発言その他を読んでみたりしますけれども、手塚治虫の子どもの頃というのは、極めて娯乐的にリッチだったんです。ご当人が貪欲だったせいもあるのかもしれませんが、宝塚に至るまで、非常に貪欲にエンターテインメントを探されていた形跡があるんです。もちろんマンガも、たくさんあったと言ってます。ところがこの戦争の結果、あの方はそれらのすべてを失ったんです。自分の子どもの頃の娯楽のすべてを失われて、何をなさったかと言うと、その失ったものを自分で再生産したんです。これがもしかすると、かなり膨大な手塚作品だったんじゃないのかという気がするのですが、何も無い世代の、私の直感的な問題かもしれません。ちなみに今日のテーマである「科学」「技術」が直結する一番恐ろしい事件は、戦争です。依然として今でもそうであることに、おそらく手塚さんなら何か発言をなさるでしょう。こういう手塚治虫の面白さもまた、私なんか語り継いで行かなければいけないかと思いました。

<さとう>

ありがとうございました。それでは最後に、眞さんからお願いします。

<手塚>

今日は『鉄腕アトム』というひとつの作品からスタートいたしました。皆さん本当にいろいろな思いで、作品に接して読んでいただいているというのが、よく分かります。これほどいろいろな話ができるということも、めずらしいのではないかと思います。たったひとつの作品に、大の大人がこんなに力説をしていくわけです。そういうマンガが日本にあるんだということが、やっぱり誇らしいと思います。実は今日皆さんの話を聞いていてとてもいい勉強になったのは、ひとつのキーワードです。そのキーワードは、もしかしたら「鉄腕アトム」、ひいては手塚治虫の作品全部を語る時の、最も大事なものかもしれないです。それは命とか哲学的な話ではなくて、荒俣さん流の言葉で言えば「かわいい」という一言です。これが実は、手塚治虫を語る時の、ものすごく大事なキーワードかもしれないです。このかわいさということの言葉の中には、ある意味で、生き物の持っている命の形、エロティシズムという言葉を使われていましたけれども、男の子から見た場合のときめきも含めてですが、そういうものが全部その中に入っていて、この表現こそがテーマに直結しているのかという気がしました。

もう、まとめになっていません。最初から富野さんに、「今日はまとまらないよ」と言われた通りです。図らずも今日、珠緒さんが最初にズバリと、「アトムというのはかわいい」と言ってくださったんです。でもこれこそが、アトムを語る上で一番大事なもので、ひいては、これから日本の科学・技術というものを見ていく時に、かわいいというキーワードが鍵になって、そこから未来が見えてくるのではないかという気になりました。なんにしても、今日の皆さんの話は、最後の締めくくりで非常に希望的な、未来に向かった観測を語っていただいたのがとても印象的で、これこそが手塚マンガの役割と言いますか、読んだ人、接した人に明るい未来・希望を感じさせるためのかわいらしさがここにあるということかと、今日のシンポジウムでは思わせていただきました。ありがとうございました。

<さとう>

パネラーの皆様、本当に長い間、楽しい貴重なお話をありがとうございました。

<手塚>

来年この江戸東京博物館で、けっこう大きな展覧会として「手塚治虫展」をいたします。デビュー作から没年の作品に至るまでを、皆さんに新たにご紹介いたすと同時に、また皆さん方のいろいろなご意見なども反映した一大展覧会にしようと思っていますので、来年の4月、ぜひともまたここに足をお運びいただきたいと思います。

<さとう>

そして、この「第2期手塚治虫アカデミー」も、来年4月に当ホールで3つのプログラムを開く予定になっています。

<手塚>

来年も今日のようなテーマを設定して、ひとつは「日本アニメの未来」です。そして「手塚治虫から発生したマンガはアートなのか」。芸術としてのマンガということ、芸術家の方々に参加していただいて話そうと思っています。最後は、やはり手塚治虫ライフワークと自分で言うておりました「火の鳥」について、また有識者の方々のご意見をお聞きしたいと思っています。来年も3回開きますので、そちらもまたご興味ありましたら、随時情報を出しますので、ぜひ足をお運びいただきたいと思います。

<さとう>

皆様ぜひお楽しみにしてください。今日は本当にどうもありがとうございました。

<手塚>

どうもありがとうございました。